高蔵遺跡第 63 次
発掘調査報告書

2024

安西工業株式会社

例　言

1．本書は、名古屋市熱田区高蔵町 409 番において実施した、高蔵遺跡第 63 次発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、集合住宅建築工事の事業主体者である株式会社プレサンスコーポレーションの依頼により、名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室（現：文化財保護課）の指導・監督のもと、安西工業株式会社が調査主体者となり、調査を実施した。

3．現地調査は令和５年８月 21 日から同年９月 15 日まで実施し、図面・写真・出土遺物の整理と報告書の作成は令和５年９月 19 日から令和６年６月 30 日まで実施した。

4．調査体制は以下の通りである。

監　督　員　林　順（名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室学芸員）

調　査　員　山下隆次、新谷嘉海（安西工業株式会社）

測　　量　榊　孝浩、鈴木敏雄（安西工業株式会社）

発掘作業員　吉田正春、中辻賀津三、谷口昌功、小西規雄、吉村　円、木村誠伸、平井翔也、島　哲司、長尾　潤、柴山陽喜（安西工業株式会社）

遺物整理　岩本めぐみ、吉盛莉世、豊田礼子、宮原みゆき、松本春香（安西工業株式会社）

5．本書で示す方位・座標は全て国土座標第Ⅶ系（世界測地系）、測量水準値は東京湾平均海面（T.P.）に基づく。

6．土層の土色は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）を用いた。

7．本書の執筆は第３章第１節を林（名古屋市教育委員会）、第４章第１節は新谷、その他は山下が行い、編集は教育委員会の指導のもと、岩本・吉盛の協力を得て山下が行った。

8．今回出土した遺物、作成した図面、写真などの記録および各種資料はすべて名古屋市教育委員会で保管している。

9．現地調査にあたり、塚本敏夫氏、清水邦彦氏にご指導を賜わりました。記して感謝申し上げます。

本　文　目　次

例言
第１章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２章　既往の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第３章　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第２節　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第４章　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第１節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第２節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第５章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　第１節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　第２節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　第３節　既往の調査からみた遺構の位置づけについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

挿図・挿表目次

第１図　高蔵遺跡周辺の遺跡（水野・林ほか 2021 を再トレース）・・・・・・・・・・・・3
第２図　調査区周辺図（高蔵遺跡北部、水野・林ほか 2021 を再トレース）・・・・・・・・4
第３図　遺構全体図及び土層断面図・・・・・・6
第４図　SK08 遺物出土状況・・・・・・・・・・7
第５図　SP20・22 遺構平断面図・・・・・・・8
第６図　出土遺物実測図１・・・・・・・・・・・10
第７図　出土遺物実測図２・・・・・・・・・・・12
第８図　SD01 土層断面図・・・・・・・・・・・16
第９図　第 63 次調査地と 1956 年調査位置図・・・17
第１表　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・　15

図　版　目　次

図版１　遺構１
　１．調査前全景（南西から）
　２．１区遺構検出状況（南西から）
　３．SD01 土層断面（南から）
　４．SD01 遺物出土状況１（南から）
　５．SD01 遺物出土状況２（南西から）
　６．SD01 完掘状況（南から）
　７．SK08 検出状況（北から）
　８．SK08 遺物出土状況（北から）
図版２　遺構２
　１．１区完掘状況１（南西から）
　２．１区完掘状況２（東から）
　３．SP20 完掘状況（南から）
　４．SP22 検出状況（南から）
　５．SP22 完掘状況（南から）
　６．SP35・36 完掘状況（南から）
　７．２区完掘状況（西から）
　８．調査後全景（南東から）
図版３　遺物１
図版４　遺物２
図版５　遺物３
図版６　遺物４
図版７　遺物５
図版８　遺物６

第１章　遺跡の位置と環境

名古屋市域は中央部に南北方向に延びる台地、その西方とその北方に広がる沖積平野、そして、市域東部の丘陵部に大別することができる（第１図）。このうち、中央部の台地は今から約６万年前に堆積したとされる熱田層からなり、名古屋城を北西端として南の熱田に向かって延びる半島状の突出部は熱田台地と呼ばれている。

高蔵遺跡（11）は、この台地の南端近くの東縁部に位置し、標高は７～ 10 mで遺跡範囲は東西 約 500 m、南北約 700 mにおよぶ。

これまでの調査で縄文時代から中世にいたるまでの遺構が確認されている。その中でも弥生時代から古墳時代にかけての墳墓や建物跡の遺構が多く確認されることから、その時代が主要な時期と考えられる複合遺跡である。高蔵遺跡の周辺においては、南に位置する玉ノ井遺跡（14）では縄文時代の墓・貝層や弥生時代の大溝などが見つかっており、森後町遺跡（21）では弥生時代の土器が採集されている。また、南方約 400 mには東海地方最大の前方後円墳である断夫山古墳（19）が、さらに、その南には白鳥古墳（20）が所在し、古墳時代の有力氏族である尾張氏の墳墓とされている。一方、北に位置する東古渡町遺跡（8）では高蔵遺跡と同様の小型方墳が見つかっている。その他、古墳時代から古代にかけての集落跡である伊勢山中学校遺跡（5）や金山北遺跡（9）の他、飛鳥時代に創建された尾張元興寺跡（7）などがある。

このように、熱田台地上でも高蔵遺跡が所在する台地の南部は、縄文時代以降、中世にいたるまで名古屋市域の中でも極めて密に遺跡が分布する地域であり、遺跡の種類も集落遺跡、古墳、寺院など様々である。古代以降についてはまだ不明な部分も多いが、この地は人々の生活拠点として長期間にわたり利用されてきたと言える（水野・林ほか 2021）。

第２章　既往の調査

高蔵遺跡は、明治 31（1898）年の斉藤恒氏による石鏃採集の報告をはじめとして、これまで多くの調査が行われてきた。昭和 56（1981）年以降は住宅建設などに伴って、おもに名古屋市教育委員会により調査され、今回の調査で 63 次となっている。調査次数は多いものの、住宅開発等に伴うため調査面積が狭い調査区もあり、遺跡の全体像を把握することは難しい。しかし、遺跡内の各地で調査が進み、少しずつではあるがその実態が明らかになってきている。

まず、これまでの調査で弥生時代については、前期から後期にかけての遺構が多く確認されている。

前期は遺跡東部の台地縁辺上で行われた調査で環濠と考えられる溝が見つかっており、この東側にあったと推定される居住域を取り囲んでいたと推測される。続いて中期になると、高蔵公園の北東部で環濠と考えられる溝が確認されているほか、中期後半を中心として、竪穴建物跡や方形周溝墓などが遺跡内の各所から見つかっている。そして、後期はこれまでに確認された遺構・遺物の量が最も多い時期であり、主に竪穴建物跡や方形周溝墓が見つかっている。竪穴建物跡は、それぞれ遺跡の北東部と南西部でそれぞれ見つかっているが、このうち南西部の第 34 次調査地点では、大型のものを含む竪穴建物跡が密集して見つかり、中国製の虺龍文鏡（きりゅうもんきょう）の破鏡も出土していることから、居住域の中でも中心となっていた地点と考えられる。また、方形周溝墓も遺跡内の南西部を中心として広い範囲から見つかっている（村木・藤井ほか 2003）。また、

居住域を取り囲むと考えられる環濠は、これまでの調査でも遺跡の北部を中心として確認されていたが、平成 28（2016）年と平成 30（2018）年に行われた高蔵公園の再整備工事に伴う試掘調査･立会調査において、東西方向に約 100 mにわたって延び、高座結御子神社（たかくらかせがみこうじんじゃ）を囲むように、その西側で南へ大きく方向を変える環濠が確認されている（伊藤・西本ほか 2020）。総じて、弥生時代は、遺跡の東側から南側にかけての台地縁辺部が居住域として利用され、西側には墓域が形成されていたと考えられる（水野・林ほか 2021）。

続いて古墳時代は、竪穴建物跡と墳墓が確認されているが、このうち竪穴建物跡については、弥生時代と同様に東部の台地縁辺部で少し確認されている程度である。一方、古墳は前期初頭、中期後半～後期前半を中心として、おもに遺跡範囲の西半で方墳が多数築かれている。このうち、前期初頭の方墳は、形態や規模、出土遺物の点で弥生時代の方形周溝墓との区分が明確ではない。また、中期後半～後期前半の方墳はいずれも小規模であるが、尾張型の円筒埴輪を採用しており、ときに首長墳と同じ大型円筒埴輪を持つことから、その造営主体は尾張の大首長によって直接的に掌握された人々だったと考えられている（藤井 2008）。さらに、高座結御子神社境内から高蔵公園内では墳丘が残る古墳もあり、このうち高蔵公園整備工事のため高蔵１号墳は昭和 29（1954）年に、２号墳は昭和 33（1958）年に発掘調査された。その結果、１号墳は直径 18 m、高さ２mの円墳で、横穴式石室を埋葬施設とする７世紀代の古墳であることが確認されている（楢崎 1955）。また、高蔵公園の再整備工事に伴い、平成 30（2018）年に実施された試掘調査・発掘調査では１号墳・５号墳・７号墳・８号墳が調査され、１号墳の位置が特定されるとともに、５号墳が埴輪を伴う方墳であること、７号墳・８号墳が川原石積横穴式石室をもつ円墳であることが確認されている（伊藤・西本ほか 2020）。

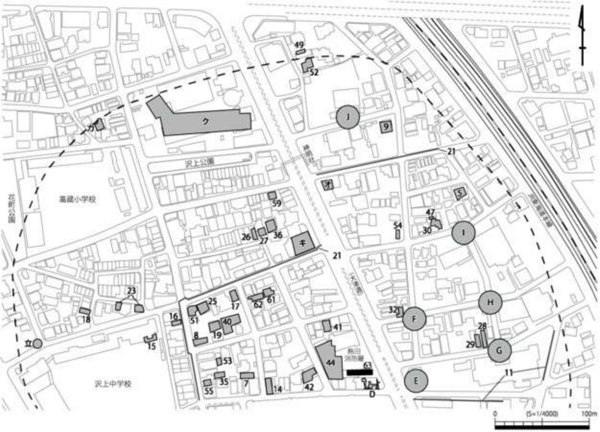
奈良時代から平安時代については、高座結御子神社周辺の遺跡南半で竪穴建物跡が見つかっている（重松・大江ほか 1987）。そして、遺跡南西部で行われた第 34 次・第 39 次調査では７～９世紀頃の遺構や遺物が多く見つかっている（村木・藤井ほか 2003）。

第３章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

今回の調査は、株式会社プレサンスコーポレーション（以下、事業者）が名古屋市熱田区高蔵町 409 番に計画した集合住宅の建設工事によるものである。 令和４（2022）年 12 月１日には、既設建物の解体工事について、事業者から文化財保護法（以下、同法）第 93 条第１項に基づく届出が名古屋市教育委員会（以下、教育委員会）に提出された。この既設建物については、その建築に先立って実施した確認調査においても遺跡の残存を確認しているが、建築行為が遺跡に与える影響は軽微と判断されたため、慎重工事で対応している。今回の解体工事についての届出に対しては、遺跡の現況を確認するため、同年 12 月６日付４教文第２-298 号で工事立会を通知した。立会時に重機提供による確認調査を実施した結果、溝と考えられる遺構や遺物包含層を確認した。令和５（2023）年５月 25 日には、集合住宅の建設工事について、事業者から同法第 93 条第１項に基づく届出が教育委員会に提出された。当該事業が遺跡に与える影響が大きいと判断されたため、同年６月７日付５教文第４-69 号で発掘調査を通知した。発掘調査については事業者、安西工業株式会社、教育委員会の三者において協定を締結、同法第 92 条第１項に基づく届出を愛知県県民文化局文化芸術課文化財室に提出した。同年８月 17 日付５文芸第 864 号にて受理通知を受けたため、同年８月 21

第１図　高蔵遺跡周辺の遺跡（水野・林ほか 2021 を再トレース）



調査年	調査主体	図中の表示	所在地
1953	南山大学（中山英司）	D	高蔵町 62（D 地点）
1956	南山大学（稲垣晋也）	D	D 地点
1988	荒木実	オ	沢上２丁目 704
1993	高蔵遺跡（花町地区）調査会（中嶋理恵）	カ	高蔵町 6-15
1993	市教委 5 次	5	沢上２丁目 704
1994	市教委 7 次	7	高蔵町 6-10
1994	市教委 8 次	8	高蔵町 1-17
1995	市教委 9 次	9	沢上２丁目 4-12
1995	市教委 11 次	11	外土居町
1996	市教委 14 次	14	高蔵町 5-18
1996	市教委 15 次	15	五本松町 4-4
1997	市教委 16 次	16	五本松町 503-1
1997	市教委 17 次	17	高蔵町 1-18
1998	市教委 18 次	18	五本松町 208-3
1998	市教委 19 次	19	高蔵町 110
1998	市教委 21 次	21	沢上２丁目他
1999	市教委 23 次	23	五本松町 3-8
1999	市教委 25 次	25	高蔵町 1-1
1999	静岡人類史研究所	キ	沢上１丁目 6-19
1999	高蔵遺跡調査会	ク	沢上１丁目 3
2000	市教委 26 次	26	沢上１丁目 621-1
2000	市教委 27 次	27	沢上１丁目 6-28
2000	市教委 28 次	28	外土居町 5-13
2000	市教委 29 次	29	外土居町 5-14
2000	市教委 30 次	30	沢上２丁目 713

調査年	調査主体	図中の表示	所在地
2000	立会調査（市教委）	立	五本松町地内
2001	市教委 32 次	32	外土居町 110
2002	市教委 35 次	35	高蔵町 617
2002	市教委 36 次	36	沢上１丁目 620-2、3
2002	市教委 40 次	40	高蔵町 108-2、109
2003	市教委 41 次	41	高蔵町 404
2003	市教委 42 次	42	高蔵町 507
2003	市教委 44 次	44	高蔵町 4
2004	市教委 47 次	47	沢上２丁目 713
2004	市教委 49 次	49	沢上２丁目 118-1
2005	市教委 51 次	51	高蔵町 602
2005	市教委 52 次	52	沢上２丁目 511-1
2005	市教委 53 次	53	高蔵町 602
2006	市教委 54 次	54	沢上町 511-1
2006	市教委 55 次	55	高蔵町 616
2013	市教委 59 次	59	沢上１丁目 611-4、611-5
2020	市教委 61 次	61	高蔵町 202-2
2021	市教委 62 次	62	高蔵町 202-2
2023	市教委 63 次	63	高蔵町 409
	田中稔氏 E 地点	E	
	（田中稔氏）F 地点	F	
	（田中稔氏）G 地点	G	
	（田中稔氏）H 地点	H	
	（田中稔氏）I 地点	I	
	田中稔氏 J 地点	J	

第２図　調査区周辺図（高蔵遺跡北部、水野・林ほか 2021 を再トレース）

日より調査を開始した。

第２節　調査の概要

今回の調査は、集合住宅建設に伴って掘削される範囲全体を調査するため、幅６m、長さ 27 mの調査区を東西方向に設定して掘削を行った。なお、排土の関係で西側（１区）と東側（２区）に分けて掘削を行った。その結果、調査区全面にわたってほぼ地山まで攪乱が達しており、そのため遺構の残りが悪く、当初遺構と認識したが、後に攪乱と判明するものもあった。

現地調査は、令和５（2023）年８月 18 日に資材等の搬入と安全防護柵の設置、調査区の位置出しを行い、同月 21 日から１区の掘削作業を開始した。１区は９月１日に調査を完了し、同月４日から２区の掘削作業を開始した。そして、同月 15 日に資材等を撤収して現地調査を完了した。

基本層序は、攪乱以外は基本的にほぼ水平堆積であり、以下の通りである。

第１層　2.5YR6/6 橙色極粗粒砂（細粒砂～中礫混じり・盛土）

第２層　7.5YR2/3 極暗褐色極粗粒砂（細粒砂～中礫、砕石、瓦混じり・盛土）

第３層　7.5YR3/1 黒褐色土極粗粒砂（細礫～中礫・レンガ片混じり・整地土）

第４層　7.5YR3/2 黒褐色極粗粒砂（やや粘性あり・包含層）

第５層　7.5YR4/3 褐色砂質シルト（地山、基盤層）

第４章　調査の成果

第１節　遺構

調査区の全面にわたって戦災や現代の建築物に伴う攪乱を受けており、全体的に遺構の残りは良くなかったが、溝１条、土坑５基、ピット 21 基を確認した。なお、遺構番号は確認順に付け、半裁を行った時点で攪乱等で遺構ではないと判断したものは欠番とした。また、遺構の記号については半裁、または完掘した時点で溝は SD、柱穴と考えられるものは SP、土坑と考えられるものは SK の記号を付けた（第３図）。

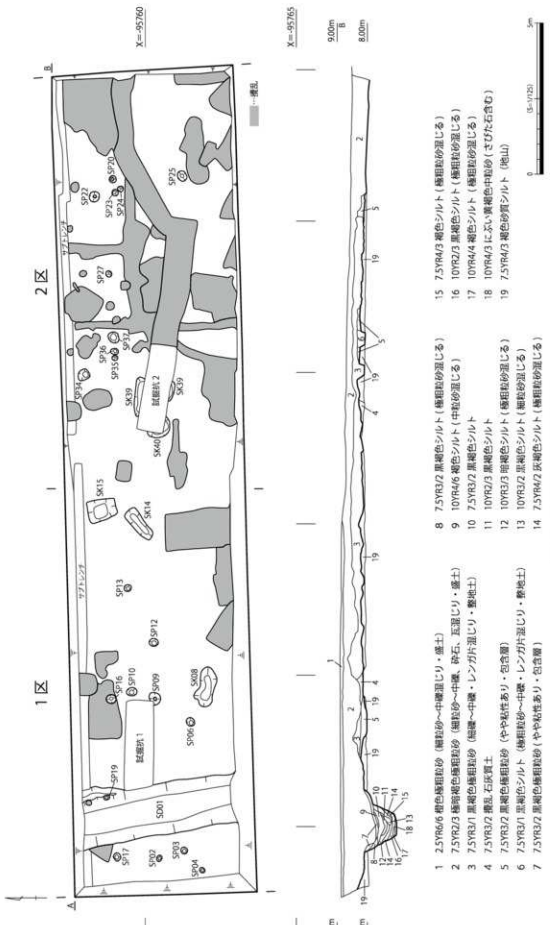
SD01

１区の西側において南北５mにわたって確認した、やや西に傾く南北方向の溝である。北側で上層の一部は南北 1.4 m、幅２mにわたって近代の攪乱を受けていたが、溝の幅は確認した面で北側は２m、中央付近で 1.69 m、南側は 1.65 m、底面の幅は北側で 0.7 m、中央付近で 0.88 m、南側で 0.6 mを測り、断面はほぼ逆台形を呈する。なお、現地表面からの深さは北側で 1.89 m、南側で 1.85 m、確認した面からは北側で 0.97 m、中央付近で 0.99 m、南側で 0.88 mである。遺物の大半は確認した面から 0.4 mまでの中～上層から出土した（第８図）。

なお、この SD01 は今回の調査地の南側で昭和 31（1956）年に実施されたＤ地点第２次調査で確認された溝（深さ 2.0 m、幅 2.0 m）に続くものと推測されるが、詳細については第５章まとめの第３節で触れることにする。

SP02

SD01 の西側に位置する。埋土は 10YR3/4 暗褐色シルト（極粗粒砂混じる）で、長径 0.22 m、短径 0.17 mの楕円形で、深さは 0.1 mである。



1　2.5YR6/6 橙色極粗砂砂（礫粗砂～中礫混じり・盛土）
2　7.5YR2/3 極暗褐色極粗砂砂（細粗砂～中礫、砕石、瓦混じり・盛土）
3　7.5YR3/1 黒褐色極粗砂砂（粗礫～中礫・レンガ片混じり・整地土）
4　7.5YR3/2 黒色、石炭質土
5　7.5YR3/2 黒褐色極粗砂砂（やや粘性あり・包含層）
6　7.5YR3/1 黒褐色シルト（極粗砂砂～中礫・レンガ片混じり・整地土）
7　7.5YR3/2 黒褐色極粗砂砂（やや粘性あり・包含層）
8　7.5YR3/2 黒褐色シルト（極粗砂砂混じる）
9　10YR4/6 褐色シルト（中粗砂混じる）
10　7.5YR3/2 黒褐色シルト
11　10YR2/3 黒褐色シルト
12　10YR3/3 暗褐色シルト（極粗砂砂混じる）
13　10YR3/2 黒褐色シルト（極粗砂砂混じる）
14　7.5YR4/2 灰褐色シルト（極粗砂砂混じる）
15　7.5YR4/3 褐色シルト（極粗砂砂混じる）
16　10YR2/3 黒褐色シルト（極粗砂砂混じる）
17　10YR4/4 褐色シルト（極粗砂砂混じる）
18　10YR4/3 にぶい黄褐色中粗砂（さびた石含む）
19　7.5YR4/3 褐色砂質シルト（Hill）

第３図　遺構全体図及び土層断面図

SP03

SD01 の西側に位置する。埋土は 10YR2/3 黒褐色シルト（極粗粒砂混じる）で、長径 0.23 m、短径 0.17 mの円形を呈し、深さは 0.08 mである。

SP04

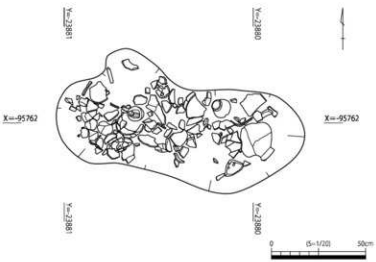
SD01 の西側に位置する。埋土は 10YR3/4 暗褐色シルト（極粗粒砂混じる）で、長径 0.19 m、短径 0.16 mのほぼ正円形、深さは 0.04 mである。

SP06

SD01 の東側に位置する。埋土は 10YR3/4 暗褐色シルト（極粗粒砂混じる）で、長径 0.3 m、短径 0.26 mのほぼ正円形、深さは 0.15 mである。

SK08

１区の南西部に位置する土坑で（第４図）、東西 1.32 m、南北は最大で 0.93 m、深さは最大で 0.11 mを測る。埋土は 10YR3/4 暗褐色シルト（極粗粒砂混じる）で、壺、甕、高杯など多くの土器が出土した。土器の多くは表面が丁寧なヘラミガキで調整され、彩色が施された土器もあることから祭祀に関係する土坑の可能性も考えられるが、土器を一括して埋納、または廃棄した土坑の可能性も考えられる。なお、焼夷弾のさやが土坑のやや西寄りで突き刺さった状態で見つかった。



第４図　SK08 遺物出土状況

SP09

SK08 の北側に位置する。一部、試掘坑１に切られているが、長径 0.41 m、短径 0.28 mの掘方に直径 0.1 mの柱痕が残る。深さ 0.3 mで、柱痕の埋土は 10YR2/2 黒褐色シルト（極粗粒砂混じる）、掘方は 10YR3/4 暗褐色シルト（極粗粒砂混じる）である。そして、柱痕の下に焼土があり、焼土は 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（極粗粒砂混じる）である。

SP10

SP09 の北側に位置する。埋土は 10YR3/4 暗褐色シルト（極粗粒砂混じる）で、長径 0.35 m、短径 0.26 m、深さ 0.08 mである。

SP12

SP09 の東側に位置する。埋土は 10YR3/4 暗褐色シルト（極粗粒砂混じる）で、長径 0.3 m、短径 0.26 m、深さ 0.14 mである。

SP13

１区のやや北東寄りに位置する。長径 0.25 m、短径 0.22 m、深さ 0.1 mを測り、埋土は 10YR2/3 黒褐色シルト（極粗粒砂混じる）である。

SK14

１区の北東に位置する。長辺 1.16 m、短辺 0.4 ～ 0.5 m、深さは最大で 0.22 mのほぼ長方形を呈し、埋土は 7.5YR3/2 黒褐色シルト（極粗粒砂混じる）、埋土から近代の瓦片が出土した。

SK15

SK14 の北側に位置する。埋土は 7.5YR2/2 黒褐色シルト（極粗粒砂混じる）で、長辺 0.94 m、短片は北側で 0.69 m、南側では 0.5 mの台形を呈し、深さは最大で 0.15 mである。埋土から近代の瓦が出土した。

SP16

SP10 の北側に位置する。長径 0.32 m、短径 0.28 m、深さ 0.15 mの掘方に直径 0.12 m、深さ 0.08 m の柱痕が残る。柱痕の埋土は 10YR4/3 にぶい黄褐色中粗粒砂、掘方は 10YR2/3 黒褐色シルト（極粗粒砂混じる）、柱痕の下に焼土があり、焼土は 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（粗粒砂混じる）である。

SP17

SD01 の西側に位置する。長径 0.27 m、短軸 0.25 m、深さ 0.13 mのピットである。埋土から近代と考えられるレンガ片が出土したことから、攪乱の可能性が高い。埋土は 10YR2/3 黒褐色シルト（中粒砂混じる）である。

SP19

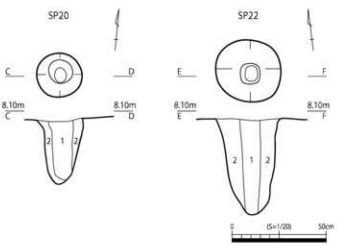
SD01 内の北東部分に位置する。埋土は 7.5YR3/2 黒褐色シルト（中粒砂混じる）である。長径 0.19 m、短径 0.05 m、深さ 0.12 mである。

SP20

調査区の北東部分に位置する柱穴である。長径 0.24 m、短径 0.23 m、深さ 0.4 mのほぼ正円形の掘方に、直径 0.12 m、深さ 0.4 mの柱痕が残る。柱痕の埋土は 7.5YR3/1 黒褐色中粒砂、掘方は 10YR4/4 褐色シルト（細粒砂混じる）である（第５図）。

SP22

SP20 のすぐ西側に位置する柱穴である。長径 0.38 m、短径 0.32 mのほぼ正円形を呈し、深さは 0.29 m柱痕の埋土は 7.5YR3/1 黒褐色中粒砂、掘方は 10YR3/4 暗褐色シルト（中粒砂混じる）である。なお、調査時に掘方の中央やや南寄りで直径 0.18 mの円形で陥没した部分があり、ある程度の時期まで柱根が残っていたと想定され、完掘すると底の方で方形となったことから、その形状の柱か杭があったと考えられる（第５図）。埋土から時期不明の土師質の壺の肩部の破片が出土した。



1　7.5YR3/1 黒褐色中粒砂
2　10YR4/4 褐色シルト（細粒砂混じる）

1　7.5YR3/1 黒褐色中粒砂
2　10YR3/4 暗褐色シルト（中粒砂混じる）

第５図　SP20・22 遺構平断面図

SP23

SP22 の南側、SP20 のすぐ西側に位置する柱穴である。長径 0.23 m、短径 0.21 mのほぼ正円形を呈し、深さ約 0.24 m、埋土は 7.5YR4/3 褐色シルト（細粒砂混じる）である。なお、確認時に掘方の中央やや北寄りで直径 0.1 mの陥没した部分があったことから柱痕と考えられ、SP20 と同様にある時期まで柱根が残っ

ていたと考えられる。

SP24

SP23 のすぐ南側に位置する。長径 0.24 m、短径 0.18 m、深さ 0.17 mで埋土は 7.5YR4/6 褐色シルト（中粒砂混じる）である。なお、このピットも SP23 と同様に確認時に掘方のほぼ中央で直径 0.1 mの少し陥没した部分があったが、半裁した際に柱痕は観察できなかった。埋土から時期不明の土師質の土器片が出土した。

SP25

２区の南東部に位置する。長径 0.35 m、短径 0.29 m、深さ 0.13 mで埋土は 10YR3/4 暗褐色シルト（中粒砂混じる）である。埋土から細片のため図示できなかったが、６条１組の櫛描凹線文と右上がりの斜線文が施された、山中式の壺の肩部の破片が出土した。

SP27

２区の中央やや北側に位置する。長径 0.21 m、短径 0.19 m、深さ 0.2 mで埋土は 7.5YR4/6 褐色シルト（中粒砂混じる）である。

SP34

２区の中央やや北側に位置する。長径 0.4 m、短径 0.33 m、深さ 0.21 mで埋土は 10YR3/4 暗褐色シルト（中粒砂混じる）である。

SP35

SP34 の南側に位置する。長径 0.19 m、短径 0.2 m、深さ 0.2 mで埋土は 7.5YR3/2 黒褐色シルト（中粒砂混じる）である。なお、半裁時に掘方の東側で直径 0.1 mの柱痕らしい堆積がみられ、完掘時にもその部分がくぼんでいたことから柱穴の可能性が考えられる。

SP36

SP35 の東側に位置する。長径 0.25 m、短径 0.2 m、深さ 0.3 mで埋土は 7.5YR4/2 灰褐色シルト（中粒砂混じる）である。なお、半裁時に柱痕らしき堆積の違いが観察できたが、確認時の平面との整合性がないためピットとした。

SP37

SP36 の東側に位置する。長径 0.39 m、短径 0.33 m、深さ 0.18 mで埋土は 7.5YR2/2 黒褐色シルト（中粒砂混じる）である。埋土から時期不明の土師質の土器片が出土した。

SK39

２区の中央やや西寄りに位置する。大部分が試掘坑２で切られているが、北側で幅 1.29 m、南側で幅 0.65 m、南北 1.2 m、深さ 0.1 mである。埋土は 7.5YR2/2 黒褐色シルトで、埋土から遺物は出土しなかった。

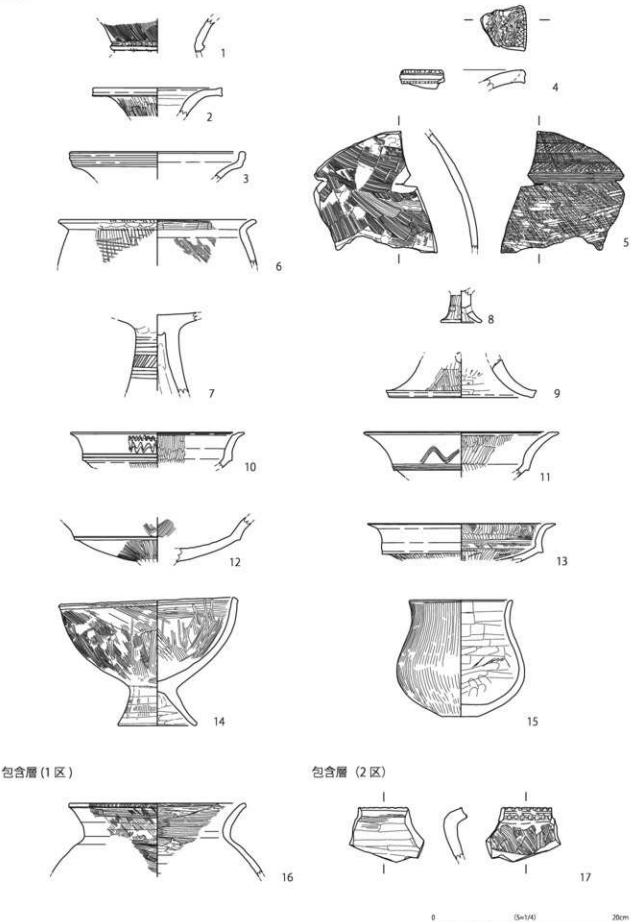
SK40

SK39 のすぐ西側に位置する。これも SK39 と同様に試掘坑２で大部分が切られており、正確な形状等は不明である。直径 0.79 m、深さ 0.22 mのほぼ円形を呈する土坑と考えられ、埋土は 7.5YR4/2 灰褐色シルト（中粒砂混じる）である。

第２節　遺物

遺物はおもに SD01 と SK08 からまとまって出土した。第６図１～ 15(図版３～５、図版８)は SD01 から、

SD01



第６図　出土遺物実測図１

第６図 16・17（図版５）は包含層、第７図 18 ～ 30（図版６～８）は SK08 からの出土である。なお、第１表の遺物観察表の備考欄に土器型式を記したが、編年は主に『廻間遺跡』（赤塚 1990）と『山中遺跡』（赤塚 1992）による。

１は壺の頸部の破片で、胴部から頸部へ屈曲する部分に突帯を貼りつけて丁寧にナデ調整を行い、突帯の上部と下部に竹管文が施されている。頸部は外面がナデ調整のあとやや斜めのハケ調整、内面は横方向のヘラケズリ調整のあとナデ調整を施すが、剥離しているように見えるほど粗い仕上げで、残存高 3.6㎝である。

２は壺の口縁部の破片である。復元口径 13.7㎝、残存高 3.0㎝、内外面とも丁寧なヨコナデ調整を施し、口縁部から頸部にかけて屈曲するあたりから櫛描直線文を施す。

３は受口状口縁の壺の口縁部から頸部にかけての破片である。全体的に磨滅しており調整が不明なところがあるが、口縁部の内面、外面ともヨコナデ調整を施す。そして、口縁部外面に１条の直線文があり、直線文の上下は２条の凹線文にみえる。復元口径 18.6㎝、残存高 2.9㎝である。

４は壺の口縁部と考えられる。内外面とも丁寧なヨコナデ調整で、内面に波状文を施す。そして、外面はゆるやかに外反する口縁端部に粘土を足して強くヨコナデ調整を施し端部の上面と下面を少し張り出させ、その部分に刻みを施す。

５は壺の胴部である。外面はハケ調整のあと７条１組の櫛描凹線文が３段巡らされ、その間に右上がりの斜線文を施す。最下段の櫛描凹線文から下はハケ調整のあと丁寧なヘラミガキ調整が施されている。内面はハケ調整のあと一部でナデ調整が施されている。

６は甕の口縁から体部の破片で、復元口径 20.9㎝、残存高 4.8㎝で、口縁端面には明瞭な面があり斜めの刺突がある。口縁部の外面はハケ調整のあとユビオサエ調整、内面はヨコハケ調整、体部の外面は縦方向の粗いハケ調整のあと横方向の浅いハケ調整、内面はナナメハケ調整のあとヨコナデ調整を施す。

７は高杯の脚部で、外面は丁寧なヘラミガキ調整、内面はナデ調整が施され、杯部から下に６条の櫛描凹線文が巡り、その下に左下がりの櫛描斜線文、そしてその下に４条の櫛描凹線文が巡る。櫛描凹線文や櫛描斜線文は等間隔ではなく不揃いである。杯部の内面が一部残っており、丁寧なナデ調整が施されている。残存高 8.5㎝である。

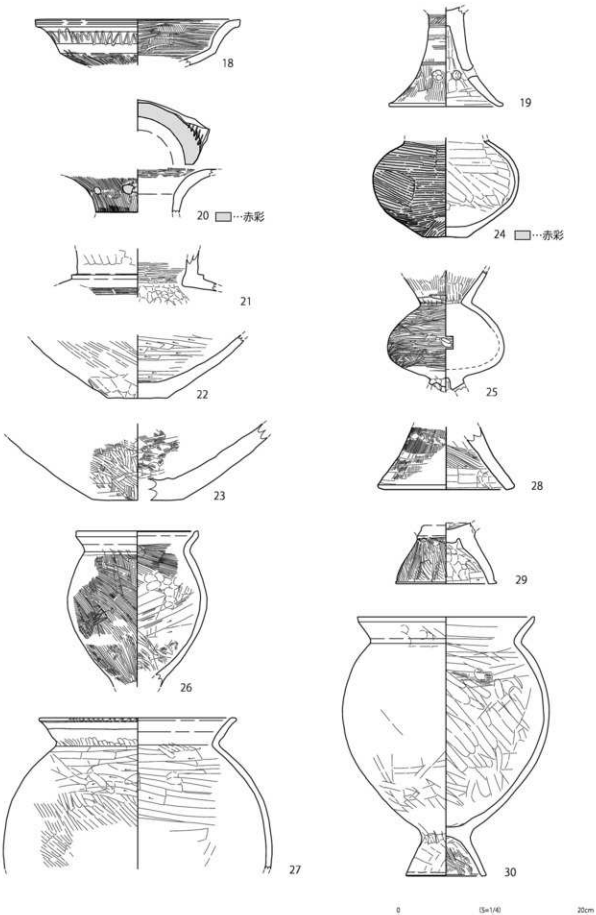
８はミニチュアの高杯の脚で３方に透孔がある。外面は丁寧なヘラミガキ調整、内面はナデ調整を施す。底径 4.3㎝、残存高 3.4㎝である。

９は高杯の脚部で、透孔の部分で割れている。外面は丁寧なヘラミガキ調整、内面は丁寧なヨコナデ調整を施す。下端部内面の一部に焼成前に貼りついたと考えられる粘土が付着している。復元底径 15.8㎝、残存高 4.0㎝である。

10 は高杯の杯部の破片で杯上部から杯下部の一部が残る。杯上部の外面は丁寧なヨコナデ調整のあと２段の櫛描波状文とその下に２条の凹線文を施し、稜の部分も丁寧なヨコナデ調整で段をつけている。内面も丁寧なヨコナデ調整で、口縁端部をやや屈曲させ端部近くに１条の突線文を施す。杯下部は内外面とも丁寧なヘラミガキ調整が施されている。復元口径 18.4㎝、残存高 3.7㎝である。

11 も高杯の杯部の破片で杯上部から杯下部の一部が残る。杯上部の外面は丁寧なヨコナデ調整のあと１段の櫛描波状文とその下に２条の凹線文を施し、稜の部分も丁寧なヨコナデ調整で段をつけている。内面は縦方向のヘラミガキ調整のあと丁寧なナデ調整で、口縁端部をやや屈曲させ端部近くに２条の突線文を施す。杯下部はヨコナデ調整のあと部分的に１条の突帯文を施す。杯下部は内外面とも丁寧なヨコナデ調整が施さ

SK08



第７図　出土遺物実測図２

れている。復元口径 20.6㎝、残存高 4.7㎝である。

12 は高杯の杯部の破片で杯下部から杯上部の一部が残る。杯上部の外面は丁寧なヨコナデ調整のあと櫛描波状文を施し、内面は丁寧なヘラミガキ調整を施す。杯下部の外面は丁寧なヘラミガキ調整、内面は表面の大部分が剥離しているが、一部でヘラミガキ調整が残る。残存高 4.7㎝である。

13 は高杯の杯部の破片で脚部と杯下部の一部が欠損する。杯上部はほぼ垂直に立ち上がってから外反し、口縁部を水平に仕上げている。杯上部の外面は丁寧なヨコナデ調整、内面は丁寧なヘラミガキ調整を施す。杯下部の内外面ともヨコナデ調整のあと丁寧なヘラミガキ調整を施す。口径 19.8㎝、残存高 4.0㎝である。

14 は鉢でハ字状に開く脚がつく。外面は口縁部から約 3.0㎝あたりまではナナメハケ調整のあとヨコナデ調整、そこから脚部まではほぼタテハケ調整のあとヨコナデ調整、内面はヘラミガキ調整のあとヨコナデ調整を施す。口縁端部はヘラで面取りしたあとナデ調整で仕上げている。口径 18.9㎝、器高 13.5㎝、底径 8.3㎝である。なお、SD01 ではこの鉢が出土した層（第８図 11 層）とその上の層（第８図 10 層）から遺物がまとまって出土し、これより下層（第８図 12 ～ 18 層）からは遺物が出土しなかった。このことから、この鉢の時期が最終的な溝の廃絶時期を示すと考えられる。

15 は椀である。体部から口縁にかけてわずかに外反し、体部は中央がやや膨らむがほぼ球形を呈す。外面の口縁部はヨコナデ調整、口縁部から底部まで丁寧なヘラミガキ調整、内面はハケメ調整のあとヨコナデ調整を施す。体部径 13.4㎝、底径 3.8㎝、器高 12.3㎝である。

16 は甕である。口縁部はゆるやかに外反し、端部外面に櫛歯刺突文を施す。外面はハケ調整のあとヨコナデ調整、内面はヨコハケ調整のあとヨコナデ調整を施す。体部は外面がナナメハケ調整、内面はヨコハケ調整のあとナデ調整を施す。復元口径 18.7㎝、残存高 7.8㎝である。

17 は甕の口縁部と考えられる。く字口縁で体部から短く屈曲し、口縁端部に粘土を足して端部下面は貼り付け突帯上にヨコナデ調整を施して成形し、上下に刻みを施す。外面は口縁部がヨコナデ調整、体部はハケ調整、内面はヨコナデ調整を施す。

18 は高杯の杯部の破片である。杯口縁部はゆるやかに外反し、外面は丁寧なヨコナデ調整のあとヘラ描きの波状文を施し、内面は丁寧なヘラミガキ調整で口縁端部をやや屈曲させ、ヨコナデ調整のあと端部近くに２条の凹線文を施す。杯下部の内面と外面はともに丁寧なヘラミガキ調整を施す。復元口径 21.6㎝、残存高 4.9㎝である。

19 は高杯の脚部である。底径 12.0㎝、残存高 10.5㎝で透孔は６方向にある。外面はタテハケ調整のあと丁寧なヘラミガキ調整を施し透孔の上部から２条１組の沈線文が杯部まで５段にわたって施され、最も上段とその下の沈線文の間に左下がりの斜線文を施す。内面はナデ調整を施す。

20 は彩色があるパレススタイル壺の頸部の破片で、体部との接合面で割れており、残存高 4.5㎝である。外面の上部は細かいタテハケ調整、下部は縦方向の櫛描文を施し、内面は頸部の屈曲部から口縁部にかけて丁寧なヘラミガキ調整と櫛歯刺突文を施すが、体部に近い部分は表面が剥離しているかのような粗い調整である。そして、外面の中央付近に直径 1.0 ～ 1.2㎝の赤彩が 3.3 ～ 3.4㎝の間隔と体部から 0.5 ～ 0.8㎝の高さで櫛描の突出部分に施される。さらに、内面は頸部が屈曲するあたりから口縁部に施されている櫛歯刺突文あたりまでの幅約 2.0㎝で口縁を囲むように帯状に赤彩が施されている。

21 は壺頸部の破片で頸部に突帯を貼りつけている。口縁部へ続く立ち上がりがほぼ垂直であることから、直口壺と考えられる。頸部外面は縦方向で幅の広いヘラケズリ調整のあとヨコナデ調整、内面はヘラミガキ

調整、体部の外面はヨコナデ調整、内面はユビオサエ調整のあとナデ調整を施す。残存高 4.3㎝である。

22 は壺の底部である。復元底径 6.4㎝で、残存高 6.7㎝である。底部は少し粘土を足して段をつけ、体部の外面とともにヘラケズリ調整のあとナデ調整、内面はヘラケズリ調整を施す。

23 は壺の底部から胴部にかけての破片である。底部の厚さが最大で 2.4㎝で胴部がゆるやかに立ち上がることから大型壺と考えられる。復元底径 9.4㎝、残存高 8.1㎝、外面はおもに縦方向のハケ調整のあとヘラミガキ調整に加えて一部でナデ調整がみられる。内面はハケ調整のあと強いユビナデ調整を施す。底部は平底で、ハケ調整で仕上げている。

24 は体部全面に赤彩されているパレススタイル壺である。体部の復元径 15.4㎝、残存高 10.3㎝、底部は平底で径 4.5㎝、ほぼ頸部まで復元できる。体部の外面はヘラミガキ調整のあと赤彩を施し、内面はヘラケズリ調整のあと丁寧なヨコナデ調整、底部外面はヘラケズリ調整のあとナデ調整を施す。

25 は脚付壺で、脚部の大部分と口縁部が欠損している。口縁部の外面はタテハケ調整のあと丁寧なヘラミガキ調整、内面はヘラミガキ調整を施す。体部外面はナナメハケ調整のあと丁寧な横方向とやや右下がりの丁寧なヘラミガキ調整、内面はナデ調整を施す。体部中央で焼成後に開けられたやや右下がりの 1.0㎝×0.4㎝の孔があるが、故意に穿孔されたものかは不明である。脚部は体部下端から約 1.5㎝下まで残っており、割れた面で２箇所の透孔が観察でき、その位置から透孔は三方と推測される。体部径 12.3㎝、残存高 12.8㎝である。

26 は台付甕である。口縁部はゆるやかに外反して端部外面を垂直に面取りし、内外面とも丁寧なヨコナデ調整を施す。体部の外面はハケ調整のあとナデ調整、台部に近い部分はヘラケズリ調整のあとナデ調整を施し、内面はヘラケズリ調整のあとナデ調整、頸部から約 3.0㎝のあたりまではハケ調整を施す。復元体部径 14.7㎝、残存高 16.4㎝、復元口径 12.9㎝である。

27 は甕の体部から口縁部にかけての破片である。口縁部の外面はヨコハケ調整のあとナデ調整で仕上げ、端部に刻みを施す。内面はヨコハケ調整のあとナデ調整、体部の外面は肩部はナデ調整、下部はタタキ調整のあと一部でヘラケズリ調整、内面はヘラケズリ調整のあとヨコナデ調整で口頸部付近はヨコハケ調整のあとナデ調整を施す。復元体部径 28.3㎝、復元口径 20.8㎝、残存高 16.0㎝である。

28 は台付甕の台部である。復元底径 14.5㎝、残存高 6.6㎝、外面は細かいタテハケ調整のあと中央付近と下部で幅約 1.5㎝のヨコナデ調整を施す。内面は粗いナナメハケ調整のあとヨコナデ調整で仕上げている。

29 は台付甕の台部である。底径 10.6㎝、残存高 6.4㎝、外面は粗いハケ調整のあとヨコナデ調整、内面はナデ調整を施す。端部はヘラで平滑に仕上げている。

30 は台付甕で、台部から口縁部までほぼ残っている。口径 18.7㎝、器高 27.4㎝、体部径 21.9㎝である。口縁部はやや内湾させてゆるやかに外反し、端部を垂直に面取りして尖り気味に仕上げている。口縁部の外面はヨコナデ調整、内面はヨコハケ調整のあとナデ調整、体部外面はナナメハケ調整のあとナデ調整、台部に近い部分はヘラケズリ調整、内面はヘラケズリ調整のあとナデ調整、台部は外面がヘラケズリ調整のあとナデ調整、内面はヘラケズリ調整のあとハケ調整を施す。

第1表　遺物観察表

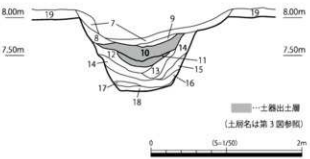
掲載番号	地区遺構層位	種類・器種	法量（cm）（復元・残存） 口径	体部径	底径	高さ	色調	外面横耕・調整	内面調整	焼成	備考
1	1区 SD01	弥生土師 壺（頸部）				(3.6)	内面 10YR6/2灰白色 外面 7.5YR8/4 浅黄橙色	頸部から頸部へ屈曲する部分に突帯を張り付けてナデ、突帯の上部と下部に円突文、頸部はナデのあとやや粗のハケ。	頸部は縦方向のヘラケズリのあとナデ、剥離しているように見えるほど粗い仕上げ。	良好	山中式
2	1区 SD01	弥生土師 壺	(13.7)			(3.0)	内面 7.5YR7/3 にぶい橙色 外面 10YR7/2 にぶい黄橙色	丁寧なヨコナデ。口縁部から頸部にかけて屈曲するあたりから頸部直線文。	丁寧なヨコナデ。	良好	山中式
3	1区 SD01	弥生土師 壺	(18.6)			(2.9)	内面 7.5YR7/3 にぶい橙色 外面 7.5YR6/3 にぶい橙色	口縁部はヨコナデ。1条の直線文があり、直線文の上下は丁寧なヨコナデ。	口縁部はヨコナデ。	やや不良	高蔵式
4	1区 SD01	弥生土師 壺	不明			(2.0)	内面 7.5YR7/6 橙色 外面 5YR6/6 橙色	丁寧なヨコナデ。口縁端面に粘土を足して強くヨコナデ。端部の上面と下面を少し張り出させ、その部分に凹み。	丁寧なヨコナデに近似する。	良好	高蔵式
5	1区 SD01	弥生土師 壺				(12.3)	内面 10YR8/3 浅黄橙色 外面 10YR8/3 浅黄橙色	ハケのあと一部ナデ。1条の櫛歯状線文が3段巡り、その間に右上がりの斜線文。最下段の櫛歯状線文からドはハケのあとヘラミガキ。	ハケのあと一部ナデ。	良好	山中式
6	1区 SD01	弥生土師 壺	(20.9)			(4.8)	内面 10YR8/2 灰白色 外面 7.5YR8/3 浅黄橙色	口縁端面に斜めの刻笵。口縁部はハケのあとコミガキ。体部は縦方向の粗いハケのあと縦方向の強いハケ。	口縁部はヨコハケ、体部はナナメハケのあと浅ヨコナデ。	良好	高蔵式
7	1区 SD01	弥生土師 高杯				(8.5)	内面 2.5YT/3 浅黄色 外面 5YR7/6 橙色	丁寧なヘラミガキ。杯部から下に6条の櫛歯状線文、その下に4条の櫛歯状線文。	丁寧なヨコナデ。	良好	山中式
8	1区 SD01	弥生土師 高杯（ミニチュア）			4.3	(3.4)	内面 10YR8/3 浅黄橙色 外面	丁寧なヘラミガキ。	ナデ。	良好	φ 0.7cmの透孔3つあり
9	1区 SD01	弥生土師 高杯（脚部）		(15.8)	(4.0)	内面 7.5YR7/3 にぶい橙色 外面 7.5YR8/3 浅黄橙色	丁寧なヘラミガキ。	丁寧なヨコナデ。	丁寧なヨコナデ。	良好	山中式 外面黒斑あり 透孔あり
10	1区 SD01	弥生土師 高杯（杯部）	(18.4)			(3.7)	内面 10YR5/2 灰黄褐色 外面 10YR8/3 浅黄橙色	杯上部は丁寧なヨコナデのあと2段の櫛歯状線文とその下に2条の円突文、軸の部分は丁寧なコナデで段をつけている。杯下部は丁寧なヘラミガキ。	杯上部は丁寧なナデ、口縁端部をやや強由させ端部近くに1条の突帯文。杯下部は丁寧なヘラミガキ。	良好	山中式 内外面黒斑あり
11	1区 SD01	弥生土師 高杯（杯部）	(20.6)			(4.7)	内面 7.5YR8/3 浅黄橙色 外面	杯上部は丁寧なヨコナデのあと櫛歯状線文。杯下部は丁寧なヘラミガキ。	杯上部は縦方向のヘラミガキのあと丁寧なナデ。口縁端部をやや強由させ端部近くに1条の突帯文。	良好	山中式
12	1区 SD01	弥生土師 高杯（杯部）				(4.7)	内面 5YR6/4 にぶい橙色	杯上部は丁寧なヨコナデのあと櫛歯状線文。杯下部は丁寧なヘラミガキ。	杯上部は丁寧なヘラミガキ。杯下部は表面の大部分が剥離してるが一部ヘラミガキ。	良好	山中式
13	1区 SD01	弥生土師 高杯（杯部）	19.8			(4.0)	内面 5YR7/4 にぶい橙色	杯上部は丁寧なヨコナデ。杯下部はヨコナデのあと丁寧なヘラミガキ。	杯上部・杯下部はヨコナデのあと丁寧なヘラミガキ。	良好	山中式 外面黒斑あり
14	1区 SD01	弥生土師 鉢	18.9		8.3	13.5	内面 5YR7/4 にぶい橙色 外面 7.5YR8/6 浅黄橙色	口縁部から3cmあたりまではナナメハケのあとヨコナデ。胴部まではタテハケのあとヨコナデ。	ヘラミガキのあとヨコナデ。口縁端部はヘラで面取りしたあとナデ。	良好	山中式 胴部内面黒斑あり
15	1区 SD01	弥生土師 鉢	(10.9)	13.4	3.8	12.3	内面 7.5YR6/4 にぶい橙色 外面 5YR7/4 にぶい橙色	口縁部はヨコナデ。口縁部から底部まで強くヘラミガキ。	口縁部から底部はハケメ調整のあとヨコナデ。	良好	山中式
16	1区 弥生層	弥生土師 壺	(18.7)		(7.8)	(7.6)	内面 5YR7/6 橙色	口縁部はゆるやかに外反し、端部外面に櫛歯刻笵文。口縁部はハケのあとヨコナデ。体部はナメハケ。	口縁部は丁寧なハケのあとヨコナデ。体部はヨコハケのあとナデ。	良好	山中式
17	2区 弥生層	弥生土師 壺か甕				(5.5)	内面 2.5YR/2 灰白色 外面 7.5YR6/1 灰白色	くず石層で体部から底で接面し、口縁端部に粘土を足して端部下面は取り付け突帯上に3コナデで強くて縦形上下に刻み。口縁部がヨコナデ。体部はハケ。	ヨコナデ。	良好	高蔵式
18	1区 SK08	弥生土師 高杯（杯部）	(21.6)			(4.9)	内面 5YR4/1 褐灰色 外面 2.5YR6/6 橙色	杯上部は丁寧なヨコナデのあとヘラ描きの波状文。杯下部は丁寧なヘラミガキ。	杯上部は丁寧なヘラミガキ。口縁端部をやや強由させ、ヨコナデのあと端部近くに1条の凹線文。杯下部は丁寧なヘラミガキ。	良好	山中式
19	1区 SK08	弥生土師 高杯（脚部）			12.0	(10.5)	内面 7.5YR7/3 にぶい橙色 外面 7.5YR8/4 浅黄橙色	タテハケのあと丁寧なヘラミガキ。透孔の上部から2条1組の櫛歯状線文が4段巡りて3段にわたっており、最も上段とその下の段線文の間に左ガリの斜線文。	ナデ。	良好	山中式 透孔 6つあり
20	1区 SK08	弥生土師 壺（パレスタイル壺）			(4.5)	(7.0)	内面 2.5YR/2 灰白色 外面 10YR8/3 浅黄橙色	上部は縦からタテハケ、下部は縦方向の櫛描文。	頸部の屈曲部から口縁部にかけて丁寧なヘラミガキと櫛歯刻笵。体部に近い部分は黒斑が剥離しているかのように見い。	良好	山中式 内外面 10R5/6 赤色の彩色あり
21	1区 SK08	弥生土師 壺			(4.3)	(9.0)	内面 10YR7/2 にぶい黄橙色 外面 7.5YR8/3 浅黄橙色	頸部に突帯を張り付け、頸部は縦方向で粗のハケ。胴部はタテハケのあとヨコナデ。体部はヨコナデ。	頸部はヘラミガキ。体部はユビオサエのあとナデ。	良好	山中式
22	1区 SK08	弥生土師 壺			(6.4)	(6.7)	内面 7.5YR6/2 灰黄色 外面 7.5YR6/6 浅黄橙色	底部はやや粘土を足して段をつけている。体部はヘラケズリのあとナデ。	体部はヘラケズリ。	良好	山中式
23	1区 SK08	弥生土師 壺			(9.4)	(8.1)	内面 7.5YR6/3 にぶい橙色 外面 10YR8/3 浅黄橙色	頸部はわもに縦方向のハケのあとヘラミガキに加え、一部ナデ。底部は平底でハケで仕上げ。	頸部はハケのあと強いユビナデ。	良好	山中式 外面黒斑あり
24	1区 SK08	弥生土師 壺（パレスタイル壺）		(15.4)	4.5	(10.2)	内面 7.5YR7/6 橙色 外面 7.5YR7/4 にぶい橙色	体部はヘラミガキのあとみ彩。底部はヘラケズリのあとナデ。	体部はヘラケズリのあと丁寧なヨコナデ。	良好	山中式 外面 2.5YR5/6 明赤褐色の彩色あり
25	1区 SK08	弥生土師 鉢付壺		12.3		(12.6)	内面 5YR7/3 にぶい橙色 外面 5YR7/6 橙色	口縁部はタテハケのあと丁寧なヘラミガキ。体部はナナメハケのあと丁寧な縦方向とやや右下がりの丁寧なヘラミガキ。体部中央で横面取に受けられたやや右下がりの1.0cm × 0.4cmの孔があり、意図に穿孔されたものは不明。	口縁部はヘラミガキ。体部はナデ。	良好	山中式 外面黒斑あり 鉢部第に透孔あり
26	1区 SK08	弥生土師 台付鉢	(12.9)	(14.7)		(16.4)	内面 7.5YR8/6 浅黄橙色 外面 7.5YR8/4 浅黄橙色	口縁部はゆるやかに外反して端部外面に櫛歯刻笵。丁寧なコナデ。体部はナナメハケのあとナデ。	口縁部は丁寧なコナデ。体部はヘラケズリのあとナデ。鉢部から約3cmのあたりまではハケ。	良好	山中式
27	1区 SK08	弥生土師 壺	(20.8)	(28.3)		(16.0)	内面 7.5YR8/4 浅黄橙色 外面 7.5YR8/3 浅黄橙色	口縁部はコナハケのあとナデ。端部に強ヨコ、体部は縦方向のハケのあとヨコナデ。頸部は強ヨコナデ。	口縁部はコナハケのあとナデ。体部はヘラケズリのあとヨコナデ。頸部は強ヨコナデのあとナデ。	良好	山中式
28	1区 SK08	弥生土師 台付鉢（脚部）			(14.5)	(6.6)	内面 7.5YR7/3 にぶい橙色 外面 7.5YR7/3 にぶい橙色	縦からタテハケのあとや中央付近と下部で輪形1.5cmのヨコナデ。	粗いナナメハケのあとヨコナデ。	良好	山中式
29	1区 SK08	弥生土師 台付鉢（脚部）			10.6	(6.4)	内面 7.5YR7/4 にぶい橙色 外面 7.5YR6/3 ～ 6/4 浅黄橙色	粗いハケのあとヨコナデ。端部はヘラで平面。	ナデ。	良好	山中式
30	1区 SK08	弥生土師 台付鉢	18.7	21.9	8.9（台部径） 27.4		内面 5YR7/6 橙色 外面 7.5YR6/3 にぶい橙色	口縁部はやや内湾させてゆるやかに外反し、端部を垂直に面取りして実用保に仕上げ。胴部はコナデ。体部はナナメハケのあとナデ。台部に近い部分はヘラケズリ。台部はヘラケズリのあとナデ。	口縁部はヨコハケのあとナデ。体部はヘラケズリのあとナデ。台部はヘラケズリのあとハケ。	良好	山中式 外面黒斑部第ごけ付着

第５章　まとめ

第１節　遺構

今回の調査においては、調査区の全面にわたって後世の攪乱を受けており、全体的に遺構の残りは良くなかったが、遺構としては１区（西側）で確認した SD01 と SK08 以外に土坑やピットを確認した。

まず、１区では SD01 と SK08 のほか柱穴と考えられるピットを確認したが、不規則な配置でまとまりがなく、その性格は不明である。おもに遺物が出土した遺構は SD01 と SK08 である。SD01 では埋土の中～上層（第８図 10 層）から遺物がまとまって出土し、第６図 14 のほぼ完形に近い鉢が遺物の中では最も深い位置（第８図 11 層）から出土した。昭和 31（1956）年の調査で人骨が見つかった溝（深さ 2.0 m、幅 2.0 m）に続くと考えられ、出土遺物から弥生時代後期末に廃絶したと考えられる。SK08 からは赤彩された壺や丁寧にヘラミガキ調整された高杯がまとまって出土した。その他、焼夷弾のさやが SP03 の北側、SP10 の東側、SK08 内の３箇所で地面にほぼ垂直に突き刺さった状態で見つかった。



第８図　SD01 土層断面図

次に、２区については道に面していることもあり遺構面まで建物の建て替え等でかなり攪乱されており、遺構の残りは良くなかった。そのうち柱痕を確認したピットが数ヵ所あったが、そのうち SP20・22・23・24 は 2.5 m の範囲内にまとまっているが、建物跡や柵等の遺構と想定できる位置関係ではなかった。

第２節　遺物

今回の調査で遺物がまとまって出土したのは SD01 と SK08 で、図示できなかった遺物も含めて概観する。

まず、SD01 から出土した遺物は第６図の１～ 15 である。SD01 では埋土の中～上層（第８図 10･11 層）から遺物がまとまって出土し、第６図 14 のほぼ完形に近い鉢が最も深い位置から出土した。実測図で示したもの以外で器種がわかるものは、壺 10 点以上、甕 10 点以上、台付壺か台付甕の台部から体部にかけての破片３点と台部１点のほか、器種不明の破片が出土している。壺の破片では、体部にナデ調整のあと波状文を施すもの、ナデ調整のあと凹線文を施し、そのあと波状文を施すもの、ハケ調整のあと櫛描き凹線文を施すものなどがある。甕の破片ではナナメハケ調整を施すもの、ヨコハケ調整のあとナナメハケ調整を施すものなどがある。破片で弥生時代中期の高蔵式に属するものもみられるが、概ね弥生時代後期の山中式に属するものが多数を占める。

次に、SK08 からは実測図で示した第７図 18 ～ 30 以外に多数の遺物が出土した。破片ではあるが細頸壺や短頸壺の口頸部や鉢の可能性のあるもののほか、高杯が出土している。そのうち、高杯については SD01 と同じ山中式に属するもののほか、杯部が深く脚部が円錐状に内湾する廻間式の特徴をもつものが杯部と脚部それぞれ最低５個体ずつある。このことから、SD01 よりは新しく弥生時代後期から古墳時代初頭の土器を一括して埋納または廃棄した土坑と考えられる。

第３節　既往の調査からみた遺構の位置づけについて

今回の第 63 次調査地の隣接地では、南側で昭和 28（1953）年と昭和 31（1956）年にＤ地点の第１次・第２次調査、西側で平成 15（2003）年に第 44 次調査が実施されている。

まず、第 44 次調査では今回の調査地のすぐ西側（第 44 次調査１区）で大型の防空壕が確認され、報告書では「大型の防空壕より東側は地山が大きく削られているようで、近代～現代と思われる溝や落ち込みはあるが、それ以前の遺構や遺物は確認できなかった。」と報告されている（野口 2006）。確かに、今回の調査では現代の盛土を除去した時点でほぼ遺構面（地山）とともに戦災や既存建物撤去に伴う攪乱等を確認した状況であった。したがって、深く掘り込まれたピット以外の遺構が少なかったことが考えられる。

次に、昭和 28（1953）年と昭和 31（1956）年に実施されたＤ地点の調査との整合性について整理しておきたい。Ｄ地点では昭和 28（1953）年の調査で南側においてコの字状に走る溝が見つかっている。そして、昭和 31（1956）年の調査では南北方向に深さ 2.0 m、幅 2.0 m の溝が見つかり、その中から人骨が発見され、南西から北東方向に貝層端が確認されている（熊田 1979）。また、報告書に掲載されている昭和 28（1953）年の調査時の写真を見ると、比較的浅い位置で遺物が出土している状況や貝層が確認できる。このことについて報告書では「発掘地点だけが高台状に残っており，この南半分に限って，表土下に貝層が観察された」とある（熊田 1979）。また、昭和 31（1956）年の調査で確認された溝は上層等で貝層が確認され、遺物も下層まで出土している地点があり、中には古墳時代の廻間式土器も報告されている（熊田 1979）。しかし、各層の層厚が不明なため実際にどの程度の深さまで貝層があったのかわからない。また、今回の調査区では貝層は全くみられず、溝（SD01）からの遺物もすべて中層以上（第８図 10・11 層）から出土し、確実に古墳時代と言える遺物は出土しなかった。このことについては、報告書に「現在はここにガソリンスタンドや消防署が建設されたため，ほとんどの遺構は潰滅してしまった。」と書かれており（熊田 1979）、今回の調査区全体がほぼ地山まで削平されていたことと符合することから、貝層が確認されなかったと考えられる。なお、昭和 31（1956）年の調査で確認された溝は幅 2.0 m、深さ 2.0 m と報告されているのに対し、今回の調査で確認した溝の深さは約 1.85 ～ 1.89 m と約 10 ～ 15㎝浅い。このことについても、1979 年に熊田氏が報告された通り「ガソリンスタンドや消防署が建設されたため」削平されたことに起因すると考えれば問題ないと考えられる。

次に、昭和 31（1956）年の調査で確認された溝と、今回の調査で確認した溝（SD01）の関係について考えたい。昭和 31（1956）年の調査区の正確な位置は確定できないが、報告書（熊田 1979）に掲載されている「第４図　Ｄ地点におけるトレンチの設定図」を忠実にトレースし、昭和 25（1950）年、昭和 38（1963）年、平成 19（2007）年に撮影された航空写真からおおよその位置を推測して位置図を作成した（第９図）。その結果、昭和 31（1956）年の「第二回発掘地域」で確認された深さ 2.0 m、幅 2.0 m の溝の北端は、報告書のスケールからすると今回の調査区の中央付近

第９図　第 63 次調査地と 1956 年調査位置図

から南へ約 3.0 ～ 5.0 mの位置になり、報告書で示されている溝の方向を考えると、今回の調査地のほぼ中央付近で確認されるはずであった。しかし、今回の調査で地山まで掘削したが対応する溝は確認されず、規模がほぼ同じ南北方向の溝は１区の西側で確認されたのみであり、昭和 31（1956）年に確認された溝からは 15 mほど西になる。今回の調査地がガソリンスタンド等の建設で削平されていたとしても、深さ 2.0 mの溝ならまず残っているはずである。もし、両者の溝が同一でないとすれば先の溝が今回の調査区まで及んでいないことになり、同一なら昭和 31（1956）年の調査位置の見直しが必要ということになる。いずれにせよ、帰属時期がほぼ同じであることから同一と考えたいが、今後の課題である。なお、昭和 31（1956）年の調査で確認された溝はＡ～Ｊ地区に分けられており、地区によっては溝の底からも遺物が出土している。一方、今回の調査で確認した溝では下層から遺物は出土しなかった。このことから、両者は同じ溝ではない可能性も考えられる。将来的に南側で再発掘の機会があれば、この問題は解決されるであろう。

高蔵遺跡はこれまでの調査で貴重な遺物が多数出土している重要な遺跡であり、今後の調査でより一層集落の実態が解明されることを期待したい。

〈参考文献〉

赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 40 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

石黒立人 1994『朝日遺跡Ⅴ（土器編・総論編）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 34 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

伊藤厚史・西本昌司ほか 2020『埋蔵文化財発掘調査報告書 86　高蔵遺跡（第 60 次）』名古屋市教育委員会

薗山誠一 1998『一色青海遺跡（考古編）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 79 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

村木　誠・藤井康隆ほか 2003『埋蔵文化財調査報告書 46　高蔵遺跡（第 34 次・39 次）』名古屋市教育委員会

村木　誠 2008「弥生－ 28　高蔵遺跡」『新修名古屋市史』資料編　考古１、名古屋市

熊田敦子 1979『高蔵貝塚Ⅰ－ 1953 年Ｄ地点第１次発掘調査－』南山大学人類学博物館

重松和男・大江逢子ほか 1987『熱田区夜寒町・高蔵遺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

田原和美・木村有作ほか 1997『埋蔵文化財文化財調査報告書 26　高蔵遺跡（第 12 次～ 15 次）』名古屋市教育委員会

楠崎彰一 1955「名古屋市熱田区高蔵第一号墳の調査」『名古屋大学文学部研究論集XI』名古屋大学文学部

野口泰子 2006『高蔵遺跡第 44 次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

樋上　昇 2002『八王子遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター

藤井康隆 2008「古墳－ 70　高蔵遺跡」『新修名古屋市史』資料編　考古１、名古屋市

水口富夫 1985『高蔵貝塚Ⅱ－ 1956 年Ｄ地点第２次発掘調査－』南山大学人類学博物館

水野裕之・林　順ほか 2021『埋蔵文化財調査報告書 92　高蔵遺跡（第 61 次・62 次）　正木町遺跡（第 22 次）　春日野町遺跡（第６次）』名古屋市教育委員会

図　　版

1．調査前全景（南西から）

2．1区遺構検出状況（南西から）

3．SD01土層断面（南から）

4．SD01遺物出土状況1（南から）

5．SD01遺物出土状況2（南西から）

6．SD01完掘状況（南から）

7．SK08検出状況（北から）

8．SK08遺物出土状況（北から）

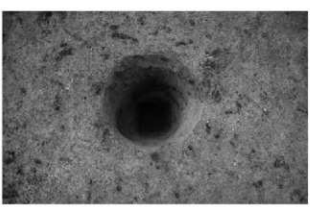
図版2　遺構2

1．1区完掘状況1（南西から）

2．1区完掘状況2（東から）

3．SP20 完掘状況（南から）

4．SP22 検出状況（南から）



5．SP22 完掘状況（南から）

6．SP35・36 完掘状況（南から）

7．2区完掘状況（西から）

8．調査後全景（南東から）

図版3　遺物1

1

2

3

5

8

4

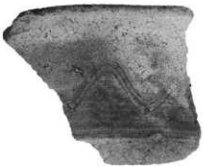
6

9

図版4

遺物2

7



11

10

12

13

14

17

15

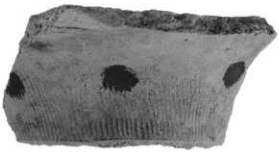
16

21

19

18

図版6　遺物4



20

22

23

24

25

26

27

28

29

30

図版8　遺物6

SD01　出土遺物集合写真

SK08　出土遺物集合写真

報　告　書　抄　録

ふりがな	たかくらいせきだい 63 じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	高蔵遺跡第 63 次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山下隆次・林　順・新谷嘉海・岩本めぐみ・吉盛莉世
編集機関	安西工業株式会社　名古屋支店
所在地	〒 453-0016　愛知県名古屋市中村区竹橋町 17- 9
発行年月日	西暦 2024 年 7 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高蔵遺跡 (たかくらいせき)	名古屋市(なごやし) 熱田区(あつたく) 高蔵町(たかくらちょう) 409 番	23100	12-1	35 度 08 分 12 秒	136 度 54 分 17 秒	2023.08.21 ～ 2023.09.15	165	共同住宅 新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高蔵遺跡	集落跡	弥生時代	溝、土坑	弥生土器、土師器	上層はかなり攪乱されていたが、確認した溝と土坑から、主に弥生時代後期の土器が出土した。

要約	高蔵遺跡は、名古屋市の中心部から南へ細長く半島状にのびる熱田台地の中央部から東辺を中心に位置し、主に弥生時代以降の各時代の遺構が確認されており、台地の南東端付近に位置する高座結御子神社を中心に数基の古墳も造営されている。今回の調査では、弥生時代中期～後期と考えられる南北方向の溝と弥生時代後期と考えられる土坑を確認した。溝は規模から昭和 31（1956）年の調査で確認された溝の続きと考えられるが、当時の調査位置が正確にわからないため今後の課題である。しかし、溝等の遺構を確認したことは重要な成果と言える。

高蔵遺跡第 63 次発掘調査報告書

2024（令和6）年7月31日

編　　集
発　　行

安西工業株式会社　名古屋支店
〒 453-0016　愛知県名古屋市中村区竹橋町 17- 9
℡ 052-526-3660

印刷・製本

橋本印刷株式会社
〒 639-2155　奈良県葛城市竹内 365 番地 1
℡ 0745-48-2305